様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １１ 日現在

機関番号：３４４２８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６４２０６２９

研究課題名（和文）傾斜地集落における地域資産としての環境価値の発見と再生

研究課題名（英文）The research of cultural heritage environment of mountainous villages in Wakayama, Japan

研究代表者
本多　友常（Honda, Tomotsune）

摂南大学・理工学部・教授

研究者番号：２０３０４１８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：集落環境における景観資産としての現状把握を目的とし、実測によるデータ採取を実施した。特に旧古座街道に沿って見られる①棚田の石垣群、②地域環境構造の重要な景観構成要素となっている民家の屋敷構え、③旧大己小学校校舎などの実測記録採取を視野に入れつつ、傾斜地集落における景観構成要素の採取を行い、景観の特徴を生み出している主要因を把握した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study is to evaluate the heritage landscape and living environment of Susami local town,Japan.There are so many beautiful inherited rural village-scape which represent the historical way of living in Samoto village in Susami town, Wakayama pref. The group of small villages have been locating along the main historical road called Koza-Kaido connecting Koza town at the east side of Wakayama peninsula. The landscape of the village is characterized with the sequence of stonewalls such as hedges for gardens, retaining walls of terraced paddy fields and even wind-breaking walls of houses. Above all, the Taiki ex-elementary school building holds the essence of spatial identity. Our measuring work of them clarified the importance of historical and cultural artifacts and landscape environment.The documentation will practically contribute for the application of Taiki elementary school preservation through board of education.

研究分野：建築計画

キーワード：文化的景観　地域資産　ワークショップ　棚田　実測調査　石垣

１．研究開始当初の背景

全国的に地域の個性的な生活環境は、新たに整備された景観として、昔の面影を残しているとは言い切れない。しかし沿道に連なる棚田と石垣、民家の屋敷構えと山林や川は、一連の文化的景観として数少ない特徴を残し、この地域の精神風土、信仰や各集落のコミュニティを支え続けている。

本研究では、すさみ町佐本地区集落一帯（道路沿いに散在している）の集落環境を、コンパクトヴィレッジとして捉え、古来より徐々に形成されてきた旧古座街道の特徴を如何に整備し、この地におけるこれからの農山村集落の環境整備のあり方を集落間の連携として考察する。

なお紀州南西部の地防己（つづら）地区と大谷地区の中間には、地域の文化財的価値としてはきわめて高いと推定される旧大己(たいき)小学校木造校舎が、廃校として残されており、保存修理に向けての緊急提言されなければ、取壊されかねない状態におかれている。

２．研究の目的

集落環境における景観資産としての現状把握を目的とし、実測によるデータ採取を実施した。特に旧古座街道に沿って見られる①棚田の石垣群、②地域環境構造の重要な景観構成要素となっている民家の屋敷構え、③旧大己小学校校舎などの実測記録採取を視野に入れつつ、傾斜地集落における景観構成要素の採取を行い、景観の特徴を生み出している主要因を把握した。

３．研究の方法

当研究は過疎高齢化集落における生活環境の持続性についての方策を探るものであり、①住民の将来に向けた意向調査、②インタビューによる記憶として語られるオーラルヒストリーの発掘、③集落環境の把握としての棚田を含めた生産域と居住域の土地利用調査、④屋敷構えの実測調査、⑤民家の実測調査、⑥地域資産の発見と発掘に応じた価値化作業（文献）、⑦これらの調査結果を基にした住民ワークショップの開催、を方法として地域の課題にたいする検討を行った。

これと平行して喫緊の課題として上述の⑥にあたる地域資産保全に向けた旧大己小学校の漏水と構造体の腐朽問題が眼前に立ちはだかっており、応急処置を受けるだけのためにしても、実測調査、報告書作成を最優先とし、本格修理への道筋を模索し、その後平行して①～⑦のプロセスを踏み研究を推進した。

４．研究成果

(1)佐本地区と旧古座街道近傍の現況

紀伊半島南端部に近いすさみ町は、古座川町長追（ながおい）から佐本深谷（ふかたに）を経て太平洋枯木灘に通じる良好な漁港である。その山側に深く登った農山村は、明治中期までの旧古座街道が、紀伊半島先端部東側の古座（こざ）と佐本川周辺集落を経由して現在の上富田町朝来（あっそ）までを結ぶ古道として、その趣を色濃く残している。そこには石垣により形成された棚田が美しく広がり、車社会の時代にしては珍しいほどの美しい農山村集落がひそやかに息づいている。

またこの地防己（つづら）地区と大谷地区の中間には、文化的景観要素としてきわめて価値の高いと推定される旧大紀（たいき）小学校木造校舎が、廃校として残されており、保存修理に向けての緊急修理が必要な状態におかれ続けている。

一方平成 27 年（2015）の国民体育大会の開催に合わせ、半島を一周する高速道路網近畿自動車道紀勢線の延伸（2015 年 8 月 30 日開通）に伴い、江住では長く切望されてきたインフラ整備事業としてのインターチェンジが建設された。これにより地域生活の利便性は大幅に改善されることとなった。この環境の激変は一方で人口移動の心配も併せもっており、地域の魅力を見失わないように、新たな時代に対応した地域固有の価値と可能性を発掘していけるチャンスであるとも言える。

(2)佐本地区における地域資産としての文化的景観要素群

当該地域一帯では住環境に寄与する地域景観の安定性が、民家、石垣(擁壁、塀)、棚田、里道、河川などの空間的要素の相互関係において維持されている。その象徴的存在として旧大己小学校校舎に焦点をあてており、沿道景観を時間軸で見ても、45 年ほどの間の変化は微細であり、極めて安定的な生活環境が維持され続けてきたことが理解される。そして近畿自動車道紀勢線のすさみインターチェンジへの開通に伴い、生活における利便性、災害対応の安全性が格段に向上した。一方自然に囲まれた集落環境としての居住空間は、過疎高齢化による影響を強く受けており、近年新たに整備された環境は必ずしも昔ながらの面影を維持しているとは言い切れない。

それでもなお沿道に連なる棚田と石垣、民家の屋敷構えなどは、一連の文化的景観として歴史的な特徴を残し、地域の精神風土、信

仰は、集落のコミュニティを支え続けている。現段階ではそれら環境構成要素の希少性について住民間で語り合いの場を設け、実測作業とは別に約 20 名の方々に、平均 1 時間程度の個別インタビューを重ねてきた。

(3) 生活環境としての文化的景観

当調査ではこの地の文化的景観について、屋敷構えや石積の擁壁など、地域環境の骨格を形成している典型例を選び出し、実測資料の記録として家屋及び棚田の関係を明らかにした。

特に家屋については、昔は佐本地区周辺の民家のほとんどの主屋は、杉皮葺の屋根で造られ、その上には風に飛ばされないように、いくつもの小石が置かれていたと言われている。それが現在ではガルバリューム鋼板の屋根に葺き替えられているため、一見したところ景観の特徴が掴み難い状態となっているが、予備調査によると、建設年代の古いものがいくつも残存していると考えられる。

(4)木造小学校の現状実測調査

調査の方法は、①地域における文化財の観点から実測を基礎にした調査を進めるとともに、②県内に残る木造小学校との比較調査、文献調査を通じ地域資産としての価値と老朽化の程度を浮かび上がらせた。同時に、③住民とワークショップ及び公開説明会を実施した。

・大己小学校の景観要素としての位置付け

傾斜地集落すさみ町旧古座街道辺縁の生活環境を、文化的景観構成要素の連なりとして捉えると個性を把握しやすいことが明らかとなった。その空間的特徴の根底にある民家の屋敷構えや棚田と地形が生み出してきた景観の特徴が、極めて象徴的に残されているのが、旧大己小学校である。115 年を超えた木造校舎が、文化的景観の一部として昔のままの特徴を象徴的に示してくれているのだ。この校舎が持っている建築的な構成は、石の擁壁を基礎として組み立てられている生活環境を象徴する骨格を有しており、文化的景観の構成要素として、重要な役割を担っていると考えられる。

それはすさみ町における「良質な景観」を地域資産価値として顕在化しているとも言える。しかも当小学校はシンプルな造りであるだけに、極めて古い原型を残しており、和歌山県における木造校舎としては最古の文化財的価値も備えていることが明らかとなった。

・旧大己小学校の概要

地域環境の景観構成要素として際立つ特長を示す旧大己小学校校舎は、地域資産としての水準の高さを示すものでありながら、その存在はまだ十分に注目の的になっているとは言いがたい。

しかし実測調査の結果は、115 年間以上の時を刻み続けてきた木造校舎として、初期の段階における原型をほぼそのままとどめていることが明らかになっており、まずはその価値を認め、老朽化の進行を止めることが喫緊の課題とすべき段階を迎えている。

ちなみに旧大己小学校校舎については資料がほとんど残されていないものの、「明治 36 年 2 月(1903)新校舎完成（当時の田舎としては最新式の建物)、大正 2 年(1913)校舎を増築、昭和 10 年(1935 年)校舎大修理」という概要は把握されている。

景観構成要素としても石垣の上に屹立する抜群の構成をみせているため、地域資産としての対応が緊急に実施されるべきものであると判断される。

・まとめ

①川筋に沿って広がる棚田を見下ろすように、石垣の上に建つ大己小学校の校舎は古座街道沿いの山間地域の景観特性を持ち、その構成要素として一役を担っている。県内に現存する明治期の校舎は 2 校であり、大己小学校の明治 36 年改築が県内で最古であることが本研究で示された

② 大己小学校の職員室及び中央の教室は明治 36 年に改築され、北側の教室が大正 2 年に増築されていることが明らかになった。36 年に改築された部分の屋根は寄棟であり、大正 2 年の増築によって隅木が外され若干の変更はあったが、基本的な骨格は増築以前と変わっておらず、115 年前のオーセンティシティを残していると言える。

③ 面積や各部分の高さや幅などの教室を主とするある一定の範囲については、当時の和歌山県の施工細則に倣って計画されていることが明示された。一方で小屋組の構造や外壁の仕上げなどについては細則に記載されておらず、特に小屋組みにおいては、同時代の類似例からも事例毎の違いが見られた。即ち大己小学校は当時の地域の状況や判断、技術によって作られており、その技術を体現していると言える。

写真 1　旧大己小学校

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）(査読有)

① Tomotsune Honda, Hiroaki Ueda, Shusuke Inachi, Ai Sakaki , Mai Ozaki
「Preservation of Taiki Old Elementary School Building as the Symbol of the Regional Environmental Sustainability, Susami Town, Wakayama, Japan」
Proceedings VolumeⅡP292-299
2014/8/8
Arte-Polis 5 Intl Conference

② Tomotsune Honda, Hiroaki Ueda, Shusuke Inachi, Ai Sakaki
The Spatial Configuration of the Local Landscape of Small Villages along the main historical road called Koza-Kaido, Japan
11th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (Tohoku University)
September 20-23,2016
B-3-5 p681-p684

③ Hiroaki Ueda, Tomotsune Honda, Shusuke Inachi, Ai Sakaki
A study on the Taiki old elementary school as the Regional Environmental heritage:frpm the measuring survey
11th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (Tohoku University)
September 20-23,2016
B-3-4 p677-p680

④Hiroaki Ueda, Tomotsune Honda
On Transition of the Way of Using School Building in Daiki Elementary School
The 10th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA)
2014/10/16
pp.569-573

〔学会発表〕（計　5　件）

①大地への親和性を際立たせる集落景観
2016 年度建築学会大会（九州）
　2016 年 8 月 24 日～26 日
農村計画

②地域資産としての大己小学校の位置付けに関する研究　その３
2016 年度建築学会大会（九州）
　2016 年 8 月 24 日～26 日
農村計画

③地域資産としての大己小学校の位置付けに関する研究：その 2
2015 年度建築学会大会（関東）
2015 年 9 月 4 日
講演番号 6046
pp.91-92

④
棚田景観構成の地域資産としての位置付けに関する研究
―傾斜地集落すさみ町旧古座街道辺縁の景観を事例としてー
2015 年度建築学会大会（関東）
2015 年 9 月 4 日
農村計画　景観・植物　pp.49-50

⑤
地域資産としての大己(たいき)小学校の位置付けに関する研究
2014 年度建築学会大会（近畿）
2014/9/12
pp.87-88

６．研究組織
(1)研究代表者
本多友常　（Honda Tomotsune）
摂南大学・理工学部住環境デザイン学科・教授
研究者番号：20304181

(2)研究分担者
稲地秀介　（Inachi Shusuke）
摂南大学・理工学部住環境デザイン学科・准教授
研究者番号：50612313

榊愛　（Sakaki Ai）
摂南大学・理工学部住環境デザイン学科・准教授
研究者番号：60581311

(3)研究協力者
上田寛彬（Ueda Hiroaki）
NPO 法人環境創造サポートセンター